Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-02

特異的焦点構造の二側面 と換喩的イメージの二つのタイプ

小松原, 哲太

(Citation)
言語の創発と身体性 : 山梨正明教授退官記念論文集:279-293

(Issue Date)
2013-03

(Resource Type)
book part

(Version)
Version of Record

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/90008921

特異的焦点構造の二側面と換喩的イメージの二つのタイプ

小松原哲太

1. はじめに

日常的に用いられる文法的な言語表現は、一見すると、詩性、修辞性とは縁遠く、過不足なく文字通りに意味内容を表していると思われる。しかし、詳細な意味論的観察のレベルでは、文字通りの意味と、文脈上で直接関与する意味とは、厳密には異なることがしばしばある。たとえば、みかんを食べている、といえば、「食べている」という文脈上では、「みかん」は皮をのぞいた果肉の意味内容だけが直接関与している。このような意味のゆらぎは、換喩と呼ばれる＊1。

換喩（metonymy）は、あるものごとで、それと近接性をもつ他のものごとを表す修辞である。次の２例は、ともに換喩的な表現である。

（1）娘がこたつでみかんを剥いている。

（2）花の影の明かなるを誇る、橋の袂（たもと）の葭簀茶屋（よしずぢゃや）に、高島田（たかしまだ）が休んでいる＊2。　（夏目漱石「虞美人草」: 69）

（1）では、「みかん」は皮の部分だけが意味的に関与しているという、厳密な意味論的観点からは換喩的である。しかしこの場合は、意味のゆらぎは一見すると気づかないほどに小さく、修辞性は低い。この点では、（1）はむしろ文法的である。これに対し、意味のゆらぎの大きい表現は、修辞的となる。（2）では、「高島田」は女の髪の結い方のひとつであるが、「休んでいる」という文脈上では、高島田結いの女を表す。高島田と女とは、連想によって結びつけられているという点では、広い意味で近接性を持つ。（1）と（2）は、近接性を持つという点ではともに換喩表現といえる。しかし、（1）と（2）を、言語使用の慣習に照らして比較するならば、（1）はよ

り文法的であり、(2) はより修辞的である、という差異がみとめられる*3。

一般に、修辞的な言語表現は、修辞的効果 (rhetorical effects) を生じる。(2) では、高島田が休んでいるというのと、高島田の女が休んでいるというのでは、文体論的イメージや想起される状況のニュアンスは、若干異なる。修辞的効果という問題は、従来の修辞に関する言語学的研究では本格的には分析がなされていない。しかし、修辞的効果は、言語コミュニケーションにおける修辞の対話的機能の一面を担うものである。言語の包括的記述という観点からは、修辞的効果の研究は、言語コミュニケーション研究の一領域を占めるものであると考えられる。

本稿の目的は、次の二点である。第一は、換喩の修辞性、逸脱性、特異性が、どのような認知的基盤から生じるのかを明らかにすることである。第二は、換喩の認知文法的構造の二側面に起因して、修辞的効果の二つのタイプが区別されることを示すことである。これに関しては、特に換喩から生じる視覚的なイメージに関する修辞的効果、すなわち換喩的なイメージの効果をとりあげて分析を行う。

本論文の構成は以下のとおりである。第2節では、修辞表現の焦点構造の特異性の分析をとおして、換喩の修辞性に関する認知的メカニズムを、二つの側面から分析する。第3節では、換喩の特異的焦点構造にもとづく修辞的効果の二つのタイプを示し、具体的な換喩現象にどのように反映されるかを示す。第4節では、本稿の趣旨と展望について述べる。

2. 換喩の修辞性

換喩は、二つのものごとの近接性に基づく比喩である。あるものから、近接関係にある他のものを探索するプロセスは、人間の持つ参照点能力 (reference point ability) の反映である (Langacker 1993、山梨 2004)。すなわち、換喩は参照点能力の反映である。換喩が参照点現象 (reference point phenomena) であるならば、換喩の修辞性、逸脱性は、参照点現象の認知プロセスの特異性、逸

脱性に起因すると考えられる。本節では、参照点現象の認知構造の二側面に応じて、換喩の修辞性には二つのタイプが区別されることを示す。2.1節では、参照点現象としての換喩の認知プロセスの構造の記述を行い、換喩の修辞性の直接の原因となる認知構造の分析を行う。2.2節では、第一のタイプ、すなわち修辞性が焦点化の特異性に起因するタイプの換喩表現に関して、また、2.3節では、第二のタイプ、すなわち修辞性が焦点シフトの特異性に起因するタイプの換喩表現に関して、それぞれ分析を行う。

2.1 換喩の認知プロセス

冒頭で挙げた2例をもう一度ここで取りあげる。(1) における「みかん」や (2) における「高島田」が文字通り表すものをプロファイル (profile) とよび、文脈上直接関与する「皮」や「女」をアクティヴ・ゾーン (active zone) とよぶ。より厳密にいうならば、アクティヴ・ゾーンとは、動詞などによってプロファイルされた関係に関して最も直接的に参与する部分のことをいう (Langacker 1984: 177)。(1) では「みかん」のプロファイルと「剥いている」の要求するアクティヴ・ゾーンが一致せず、また (2) では「高島田」のプロファイルと「休んでいる」の要求するアクティヴ・ゾーンが一致していないことが問題となる。一般に換喩は、アクティヴ・ゾーン／プロファイルの乖離 (active zone/profile discrepancy) として特徴づけられる。

換喩の理解はこの乖離を解消することによって可能となるが、これは次のような参照点現象の認知プロセスによって特徴づけられる。

図1は、(2) における参照点現象の認知プロセスを示すものである。この認知プロセスには、次の5つの要素が区別される。すなわち、(i) C: 認知主体 (conceptualizer) (ii) R: 参照点 (reference point) (iii) T: ターゲット (target) (iv) メンタルパス (mental path) (v) D: ドミニオン (dominion) である。認知主体とは、たとえば (2) を解釈する主体である。認知主体は、文の中で修辞的な焦点となる語、つまり「高島田」を参照点Rとしてターゲット T を探索するプロセスを行う。破線の矢印で描かれたメンタル

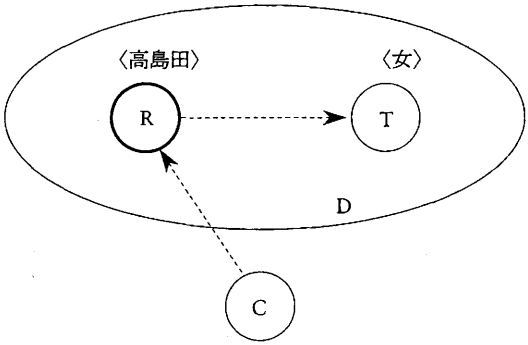

図1　換喩の認知プロセス

パスは、認知主体が参照点に注目し、これを手がかりとしてターゲットを定めるプロセスを表す。ドミニオンDは、ターゲットの候補の集合を表す。参照点現象との関連では、換喩の認知プロセスは、修辞的な焦点となる語の文字通りのプロファイルを参照点とし、文脈上要求されるアクティヴ・ゾーンをターゲットとして定めること、として記述することが可能である。

以上は、換喩の認知プロセスの一般的な特徴づけである。(1)と(2)では、ともに上述の認知プロセスがみられる。しかし、(2)は(1)よりも相対的に修辞性が高い。この修辞性は、言うなれば文法的表現からの逸脱性である。換喩が参照点現象の認知プロセスの反映であるならば、換喩の逸脱性は参照点現象の認知プロセスの特異性の反映であると考えられる。参照点現象の認知プロセスには、5つの側面が存在することを先に述べた。以下では、このうち、参照点の特異性と、メンタルパスの特異性が、換喩の修辞性に直接的に関与することを示す。2.2節では、参照点の特異性から生じる修辞性について、2.3節では、メンタルパスの特異性から生じる修辞性について述べる。

2.2　焦点化の特異性

本節では、参照点の特異性、言い換えるならば、参照点として何を焦点化するかに関する特異性から生じる、換喩の修辞性を分析していく。冒頭の例を再び取りあげると、(2)は(1)よりも修辞的

であるといえる。この2例には、次のような共通点と相違点が挙げられる。共通点は以下の二点である。第一に、下線部の修辞的焦点のプロファイルと動詞の要求するアクティヴ・ゾーンには乖離がみられる。第二に、参照点とターゲットの関係は、みかんの皮、高島田の女、というように、[NP_1 の NP_2] という修飾・被修飾関係をあらわす構文によって言語化することができる。参照点、ターゲットの参照点関係を明示する構文を、参照点構文（reference point construction）という（Langacker 2009：53）*4。これに対し、相違点は次の点である。(1) では、文脈上みかんから皮を連想することは慣習化されているが、(2) では、文脈上高島田から女を連想することは相対的に難しい。比喩的にいうならば、(2) は (1) よりも、相対的に参照点とターゲットの乖離が大きく、近接性が低い。

この連想の難しさには、アクティヴ・ゾーンに対する、参照点の選択の特異性が関わると考えられる。一般に、参照点には際立ち（cognitive salience）の高いものが選択される。際立ちの高さには多次元的な階層性が存在する。Langacker（1993：30）では、何が換喩の参照点となるかに関して、以下の際立ちの原則（principles of cognitive salience）が提案されている。

(A-1) 人＞人以外

(A-2) 全体＞部分

(A-3) 具体的＞抽象的

(A-4) 可視的＞不可視的

（不等号は際立ちの高さの大小を表す）

(1) では、アクティヴ・ゾーンとなる皮が果実の部分であるのに対し、参照点となる「みかん」は果実の全体をプロファイルする。よって、(1) は原則 (A-2) に従って、換喩の参照点が選択されているといえる。一方 (2) では、アクティヴ・ゾーンとなる女は人であり、髪型に関していわば全体であるのに対し、参照点となる「高島田」は人ではなく、部分的特徴である。つまり、(2) における参照点の選択は、原則 (A-1) と (A-2) に違反しているといえる。この点からは、(2) の修辞性は、参照点の選択の特異性、言い換えるならば、認知的な際立ちの低いものを参照点として焦点化

するという、焦点化の認知プロセスの特異性に起因していると考えられる。

2.3 焦点シフトの特異性

本節では、メンタルパスの特異性、言い換えるならば、自然な焦点シフトのプロセスから逸脱した焦点シフトから生じる、換喩の修辞性をとりあげる。

(3) 子犬の足が傷ついている。

(4) 大きなガラス戸をからから押し明けながら谷川の湯殿の窓敷居の上を、千代子の素足が渡って行った。

(川端康成「春景色」: 242)

(4) は (3) よりも修辞的であるといえる。この2例には、次のような共通点と相似点がみられる。共通点は次の二点である。第一に、ともに、参照点構文 [NP_1 の NP_2] によって、参照点とターゲットの参照点関係が明示されている。第二に、[NP_1 の NP_2] という名詞句において、ともに NP_1 が全体、NP_2 が部分となっている。すなわち、参照点は際立ちの原則に従って選択されている。これに対し、相違点は次の二点である。第一に、(3) では基本的にアクティヴ・ゾーンとプロファイルの不一致はほとんど感じられない。厳密には、「傷ついている」のは足全体ではなく足の一部であるという点では換喩的であるが、ほとんど文法的である。これに対し (4) では、名詞句の主要部は「素足」であるから、主語のプロファイルは「素足」であり、「渡って行った」のアクティヴ・ゾーンは「千代子」である。よって、アクティヴ・ゾーンとプロファイルの不一致は相対的に大きい。第二に、第一点と部分的に重複するが、(3) では「傷ついている」のアクティヴ・ゾーンは、参照点構文のターゲットとなる「足」の一部分であるのに対し、(4) では「渡って行った」のアクティヴ・ゾーンは「素足」のいわば全体である「千代子」である。

以上の事実は次のことを意味する。すなわち (3) (4) では、参照点構文によって明示された参照点関係に加えて、プロファイル／アクティヴ・ゾーンの乖離を解消するための参照点関係が生じる。

この第二の参照点関係において、(3) では全体から部分への焦点シフトが関わるのに対し、(4) では部分から全体への焦点シフトが関わる。

図2 (a) は (3) のタイプ、(b) は (4) のタイプの換喩の認知プロセスを示す。参照点構文 [NP_1 の NP_2] において、NP_1 と NP_2 の関係が物理的な部分全体に関わる場合、ドミニオンは、参照点と等しくなる (山梨 2004: 61)。このことが図2 (a) と (b) における $R_1 = D_1$ として表されている。逆にいえば、参照点構文 [NP_1 の NP_2] によって、「子犬」と「足」、「千代子」と「素足」との間には、全体と部分の関係が構築される。R_1 から T_1 へのメンタルパスあるいは焦点シフトは、ズーム・イン (zoom-in) の認知プロセスとして特徴づけることができる。(a) では、ズーム・インの認知プロセスが二つ組み合わされているのに対し、(b) では、アクティヴゾーン／プロファイルの不一致に起因する R_2 (「素足」) から T_2 (「千代子」) への参照点関係は、部分から全体への焦点シフトであり、ズーム・アウト (zoom-out) の認知プロセスとして特徴づけることができる。

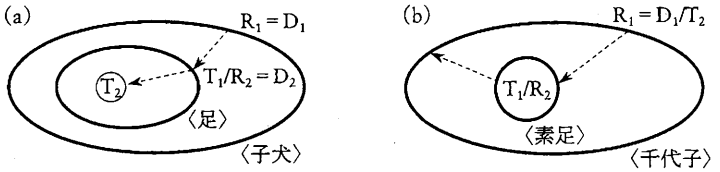

図2 焦点シフトの特異性

一般に、ズーム・インの認知プロセスが反映された言語事例は、ズーム・アウトの認知プロセスが反映された言語事例よりも、高い頻度で観察される傾向がある (山梨, p.c.)。この事実は、次のような自然な焦点シフトに関する原則を示唆する。

(B-1) ズーム・イン > ズーム・アウト

(不等号は焦点シフトの自然さの大小を表す)

(3) の認知プロセスでは、ズーム・インのプロセスのみが関わるのに対し、(4) の認知プロセスでは、ズーム・インに加えてズーム・アウトのプロセスが関わる。よって、(4) のタイプの換喩

の認知プロセスは原則（B-1）に違反しているといえる。この点からは、(4) の修辞性は、部分から全体へズーム・アウト的にターゲットを探索する認知プロセスの特異性、言い換えるならば、焦点シフトの特異性に起因していると考えられる*5。

3. 換喩的イメージの二つのタイプ

前節では、換喩の修辞性に関する認知的メカニズムを分析した。本節では、換喩の修辞的効果を特徴づける認知的メカニズムに関して、分析を行う。3.1 節では、参照点の焦点構造と換喩の視覚的イメージの対応関係の観点から、換喩の修辞的効果の二つのタイプを示す。3.2 節から 3.4 節では、換喩的イメージの二つのタイプが、具体的な換喩現象にどのように現れているかを示す。3.2 節では、知覚的イメージを、3.3 節では、カテゴリー化に関するイメージを、3.4 節では、事態認知のイメージをとりあげ、それぞれの修辞的効果として、近視的、あるいは遠視的イメージが生じることを示す。

3.1 遠視的イメージと近視的イメージ

前節で取り上げた修辞的な換喩の例である（2）と（4）には、次のような共通点と相違点がある。共通点は、ともに修辞性の高い換喩表現であり、換喩の参照点とターゲットは、[NP_1 の NP_2] という参照点構文によって、近接関係を明示することができることである。一方、相違点は、参照点構文におけるトラジェクター・ランドマーク配列（trajectory/landmark alignment）にある。[NP_1 の NP_2] という参照点構文は、全体として名詞句であり、この種の名詞句構造においては、NP_1 はランドマーク、NP_2 はトラジェクターとなる（Langacker 1991：172）。(2) で修辞的な焦点として参照点となる「高島田」は、修辞理解のプロセスで想起される参照点構文「高島田の女」においてランドマークに対応するのに対し、(4) で修辞的な焦点として参照点となる「素足」は、参照点構文のトラジェクターに対応する。

この参照点の焦点構造の対照性は、修辞的効果に反映される。参

照点が参照点構文のランドマークをプロファイルする換喩は、遠視的イメージ（far-sighted image）を生じ、トラジェクターをプロファイルする換喩は、近視的イメージ（near-sighted image）を生じる。

表1は、換喩的イメージの二つのタイプの性質を示すものである。換喩は、参照点関係を明示する参照点構文において、参照点がトラジェクターにあたるかランドマークにあたるかに基づいて、二つのタイプが区別される（小松原 2012：97–106）。換喩の二つのタイプは、修辞的効果の二つのタイプを生じる。

表1　換喩的イメージの二つのタイプ

	遠視的イメージ	近視的イメージ
参照点	ランドマーク	トラジェクター
描写の視点	印象的	写実的
視覚イメージ	ズーム・イン的	ズーム・アウト的
修辞性の要因	焦点化の特異性	焦点シフトの特異性

(2) では、「高島田」は茶屋付近の状況を視覚的・文化的特徴を印象的に焦点化して描写する語句であり、状況の外部から眺める視点、すなわち遠視的なイメージに導かれる。ターゲットが女として特定されるプロセスは、平常の視点へとズーム・イン的に焦点合わせを行う視覚イメージを生じる。(4) では、「素足」は歩く千代子の姿の一部分だけを写実的に描写する語句であり、近くで注視する視点、すなわち近視的イメージに導かれる。ターゲットが千代子として特定されるプロセスは、平常の視点へとズーム・アウト的に焦点合わせを行う視覚イメージを生じる。

次節以降では、この換喩的イメージの二つのタイプが、一般の換喩に広くみられることを示す。3.2節では［NP_1 の NP_2］にもとづく換喩、3.3節では［NP_1 は NP_2 である］にもとづく換喩、3.4節では［C_1 ならば C_2］にもとづく換喩（C は節（clause））を、それぞれ具体事例を挙げながら分析していく*6。

3.2　知覚的認知の換喩的イメージ

参照点構文［NP_1 の NP_2］による換喩理解は、知覚的認知の換喩的イメージに関わる。前節で取りあげた（2）と（4）は、このタイプにあてはまる。遠視的イメージの例としては、（2）に加え、以下のようなものが挙げられる。

（5）君釣りに行きませんかと赤シャツがおれに聞いた。

（夏目漱石『坊っちゃん』: 46）

（6）羅生門が、朱雀大路にある以上は、この男の他にも、雨やみをする市女笠や揉烏帽子が、もう二三人はありそうなものである＊7。（芥川龍之介「羅生門」: 145）

（5）では、［赤シャツの男］、（6）では、［市女笠の女］や［揉烏帽子の男］のように近接関係を明示することができ、すべて、参照点構文［NP_1 の NP_2］のランドマークが参照点となる。結果として生じる遠視的イメージは、（6）では、遠くから羅生門付近を眺めており、個々の人間ははっきり見えず、特徴となる笠や帽子のみが焦点化されている、という換喩的イメージが想起される＊8。

（4）と同様に、次の例でも、近視的イメージの修辞的効果が生じる。

（7）文鳥の足は向うの留まり木の真中あたりに具合よく落ちた＊9。（夏目漱石「文鳥」: 84）

（7）では、参照点構文によるズーム・インの認知プロセスにより、「文鳥」と「足」の間に部分全体関係が構築されている。（7）では、籠に近づいて文鳥をじっくりと眺め、留まり木に留まる足を写実的にとらえているような近視的イメージが生じる。

換喩表現から生じる換喩的イメージは、解釈上想起されるデフォールト的な参照点構文によって異なることに注意する必要がある。たとえば（5）では、［男の赤シャツ］という参照点構文が想起される場合には、赤シャツに特に注目し、赤シャツという男の所有物が口を聞いたような修辞的効果、すなわち近視的イメージを生じる。

3.3　カテゴリー認知の換喩的イメージ

参照点構文［NP_1 は NP_2 である］にもとづく換喩的理解は、こ

の構文がしばしばカテゴリー判断の意味をもつことからも分かるように、カテゴリー認知の換喩的イメージに関わる。名詞述語文では、NP_1は節の主語としてトラジェクターとなり、NP_2は述語としてランドマークとなる（Langacker 1991：66）。

遠視的イメージの例は、以下のようなものがある。

（8）ただ、お寒うございます、お寒うございます、悪いものが降りましてお寒うございますると言うて

（幸田露伴「風流微塵蔵」：47）

（9）その夏から秋にかけて、私は二人の女から感情を要求された。

（川端康成「明日の約束」：240）

（8）では、下線部「悪いもの」は「降りまして」という文脈上では「雪」を表すといえる。この種の例では、抽象度に関するプロファイル・アクティヴ・ゾーンの乖離が問題となる。ここで、「雪」と「悪いもの」の類と種の近接関係は、［雪は悪いものである］というデフォールト的な参照点構文によって明示することができる。「悪いもの」は、デフォールト的な参照点構文におけるランドマークに対応し、したがって、印象的な特徴だけを捉えるような遠視的イメージの効果を生じる。（9）でも、［恋愛感情は感情である］という参照点構文において、ランドマークが換喩の参照点として選択されている。（8）（9）ではともに、文脈上要求されるアクティヴ・ゾーンに対して、抽象度の高い名詞句が参照点となっている＊10。この点からは、（8）（9）にみられる遠視的イメージは、原則（A-3）に違反していることに起因していると考えられる。

近視的イメージにあたる例は、次のようなタイプのものである。

（10）もし馬鈴薯（ポテトー）が金剛石（ダイヤモンド）より大切になったら、人間はもう駄目であると、代助は平生から考えていた。

（夏目漱石「それから」：167）

（10）では［馬鈴薯は食べものである］［金剛石は美しいものである］というデフォールト的な参照点構文によって、類と種の近接関係を明示することができる。この例では、参照点構文［NP_1はNP_2である］におけるトラジェクターが修辞的な焦点として参照点となっており、したがって近視的イメージの効果を生じる。（10）

では、典型例というべき「金剛石」に局所的に焦点をあてることにより、具体的な物体のイメージから美の一般概念へと、ズーム・アウトしていく視覚イメージを生じる。

3.4 事態認知の換喩的イメージ

参照点構文［C_1ならばC_2］にもとづく換喩的理解は、事態認知の換喩的イメージに関わる。主節と副詞節からなる複文において、副詞節はランドマークとして、主節はトラジェクターとして位置づけられる（Langacker 1991：424）。この参照点構文においては、C_1はランドマークとなり、C_2はトラジェクターとなるといえる。

遠視的イメージの例は、以下のようなものがある。

(11)そこで主人はためらわずに、電話のダイヤルを廻したわけだった。　（井上ひさし『モッキンポット師の後始末』：84）

(11）では、下線部「電話のダイヤルを廻した」は電話をかけたことを表すといえる。この2つの節の近接関係は、［電話のダイヤルを廻したならば電話をかけた］という、常識的な推論を表すデフォールト的な参照点構文によって明示される。ここでは参照点構文［C_1ならばC_2］のランドマークが修辞的焦点として参照点となっており、従って遠視的イメージを生じる。(11）では、電話をかけるという事態の中で、事態を象徴するような特徴的動作が描写されている。事態の一部分だけを明示しているという点からは、この種の修辞性は原則（A-2）に違反していることに起因していると考えられる。

以下の2例は、近視的イメージの例である。

(12)今度は手紙を書かない方が却(かえ)って不安になって、何の意味もないのに、只この感じを駆逐する為に封筒の糊を湿(しめ)す事があつた。　（夏目漱石「それから」：16–17）

(13)後に同胞(はらから)を捜(さが)しに出た、山椒大夫(さんしょうだゆう)一家の討手が、この坂の下の沼の端(はた)で、小さい藁履(わらぐつ)を一足拾った。それは安寿(あんじゅ)の履であった。　（森鴎外「山椒大夫」：288）

(12）では、下線部は文脈上手紙を書くことを表し、(13）では、下線部は文脈上安寿の入水を表す。両者ともに、参照点構文［C_1

ならば C_2］のトラジェクターが修辞的焦点として参照点となっており、従って近視的イメージを生じる。(13) では、事態の結果的局面が焦点化されて写実的に描写されることにより、イベント全体へとズーム・アウトするような視覚イメージを生じる。

4. おわりに

本稿では、換喩の修辞性と修辞的効果を、焦点構造の特異性の観点から論じた。換喩は、修辞的効果によって二つのタイプを区別することができる。第一は、遠視的イメージを生じるものであり、第二は、近視的イメージを生じるものである。参照点とターゲットの近接関係を明示する参照点構文に関して、第一のタイプは、ランドマークが参照点となり、第二のタイプは、トラジェクターが参照点となる。

換喩は、文法にとって骨格的な修辞構造であるばかりではなく、コミュニケーション上の対話的機能に関しても重要な役割を担う。換喩の対話的機能の1つは、解釈者に独特のイメージを生じさせることである。本稿では、焦点化と焦点シフトの認知プロセスの観点から、換喩的イメージの認知的基盤を記述、分析を行った*11。

---

*1 修辞学では、換喩、提喩、転喩は、厳密には区別される。狭義の換喩は、2つのものの近接性にもとづく比喩である。提喩 (synecdoche) とは、部分と全体の関係、あるいは類と種の関係にもとづく比喩である。転喩 (metalepsis) とは、事態の先後関係、あるいは因果関係にもとづく比喩である。本論文では、近接性という概念を広義にとり、3つを総称して広く換喩とよぶ。

*2 本稿で例文として引用したテクストは、原則として旧漢字・旧仮名遣いを改めた他、言語学的分析に大きな影響を与えないと考えられる範囲での改変を含む。

*3 (2) の換喩的理解に関して最も決定的な文脈は「休んでいる」という動詞であるが、「葭簀茶屋に」という修飾句も部分的に関わる。一般に、文の修辞的意味は、それぞれの語句の相互依存的な意味論的ゆらぎの総体として特徴づけられる。この点からは、ある文の文法的・修辞的に関する区別は相対的であ

り、相対的に大きな意味論的ゆらぎが修辞として認知されるにすぎないと考えられる。

＊4 Jakobson（1956：77）では、換喩は、本来連辞関係にある2つのものが、範列関係としてあらわれるものとして位置づけられた。参照点構文との関連でいうならば、換喩は、連辞的参照点構文が範列関係へと縮退したものとして特徴づけることができる。

＊5 一見すると（6）のズーム・アウト性は、参照点のとり方に依存しているように思われる。しかし、次の例の修辞性は、（6）のタイプとは厳密には異なることに注意すべきである。

（i）大きなガラス戸をからから押し明けながら谷川の湯殿の窓敷居の上を、素足が渡って行った。

（i）では、素足からアクティヴ・ゾーンである千代子（ここでは千代子という文脈は無いが）が、「素足の千代子」という参照点構文によって明示される参照点関係によって定められる。このタイプは、むしろ（4）と同じ修辞性をもつものといえる。

＊6 尾谷（2004）では、[NP_1 の NP_2]、[NP_1 は NP_2]、[C_1 ので C_2] が参照点構文として分析されている。本論文では、[C_1 ならば C_2] も、C_1 の条件を参照点として、C_2 の主節内容ターゲットとして定める参照点構文とみなす。

＊7 佐藤（1978：116）の挙げた例文である。

＊8 （5）では、『坊っちゃん』の前後文脈から分かる通り、「赤シャツ」はあだ名として用いられている。あだ名（nickname）の修辞的メカニズムの一部は、換喩の遠視的イメージ、つまり印象的な特徴のみを焦点化するという性質に認知的基盤を持つと考えられる。

＊9 山梨（1988：105）の挙げた例文である。

＊10 カテゴリー認知に関する遠視的イメージは、漠然とした表現を用いることで直接的な表現を避けるという点で、婉曲語法（euphemism）に関わる。

＊11 換喩の問題は、山梨正明教授が長年にわたって研究対象としてきた言語現象のひとつである。本稿のアイデアの多くは、山梨教授の講義とディスカッションを通して得られたものである。

引用例出典

芥川龍之介（1995/1915）「羅生門」『芥川龍之介全集第一巻』：pp. 145–154. 岩波書店.

井上ひさし（1974）『モッキンポット師の後始末』講談社.

川端康成（1970/1927）「春景色」『川端康成全集第一巻』：pp. 227–245. 新潮社.

川端康成（1980/1925）「明日の約束」『川端康成全集第二巻』：pp. 227–246. 新潮社.

幸田露伴（1950/1893）「風流微塵蔵」『露伴全集第八巻』：pp. 1–448. 岩波書店.

夏目漱石（1929/1906）『坊っちゃん』岩波書店.

夏目漱石（1956/1907）「虞美人草」『漱石全集第五巻』：pp. 3–316. 岩波書店.

夏目漱石（1956/1909）「それから」『漱石全集第八巻』: pp. 3–254. 岩波書店.
夏目漱石（1994/1908）「文鳥」『漱石全集第十二巻』: pp. 79–98. 岩波書店.
森鴎外（2008/1915）「山椒大夫」『森鴎外』: pp. 247–297. 筑摩書房.

参考文献

Jakobson, Roman. (1956) Two Aspects of Language and Two Types of Aphasic Disturbances. in Jakobson, Roman, and Morris Halle. (eds.) *Fundamentals of language*, pp. 53–82. The Hague: Mouton.

小松原哲太（2012）「修辞理解のメカニズムに関する基礎的研究—転義現象の分析を中心に—」京都大学人間・環境学研究科修士論文.

Langacker, Ronald W. (1984) Active Zones. *Proceedings of the annual meeting of the Berkeley Linguistics Society* 10: pp. 172–188.

Langacker, Ronald W. (1991) *Foundations of Cognitive Grammar*: Volume 11 Descriptive Application. Stanford: Stanford University Press.

Langacker, Ronald W. (1993) Reference-point Constructions. Cognitive Linguistics 4 (1): pp. 1–38.

Langacker, Ronald W. (2009) Metonymic Grammar. in Panther, Klaus-Uwe, Linda L. Thornburg, and Antonio Barcelona (eds.) *Metonymy and Metaphor in Grammar*, pp. 45–71. Amsterdam: John Benjamins.

尾谷昌則（2004）「自然言語に反映される認知能力のメカニズム—参照点能力を中心に—」京都大学人間・環境学研究科博士論文.

佐藤信夫（1978）『レトリック感覚』講談社.

山梨正明（1988）『比喩と理解』東京大学出版会.

山梨正明（2004）『ことばの認知空間』開拓社.